

『こころへのアプローチ』

1. はじめに

①問題の提起

このレポートでは、「宗教者の平和に対するアプローチ」を行う上での可能性と、その実際の取り組み方を、真言密教の実践修行としての「観法」を中心に考察いたしました。その選択の理由は、宗教離れ・寺離れと言われて久しい中、檀信徒の数が年々低下する一方で、不特定多数の方への宗教的な実践体験には、熟年層から若年層まで幅広い関心が寄せられています。

特に、「阿字観」の実修については、修行の初歩から取り組むことが可能で、呼吸ができる状態で有れば、身体の不自由はハンデにはならず、熟達してもその奥深さから終生つづけられる、誰にとっても有効な精神修養のプログラムとして期待されているからです。

更に実修を継続すれば、指導する教師にとっては、自らのこころへのアプローチの成果が、参加者の態度の変化や反響から読み取ることが出来、参加者にとっても、修行者と親しく交流する機会が出来、密教に対する偏見や思い違いを是正できる好機にもなります。

その結果、僧俗一体となった「和合衆」の構築が容易になり、神頼みだけではなく、各々が神仏と向かい合う時のこころ構えを学ぶ機会を得、すべきことが定まり、こころ豊かな人生を送る下地が完成していきます。

以上の段取りで、その時代その地域の多くの人々のこころに余裕ができたとき、周囲の環境にも影響を与え、如いては「平和」な状態も保たれるのではないのでしょうか。このスタンスを土台に如何にアプローチをしていくかを考えることと、直接の成果につながり無いかからと言って、対処法に終始してしまい、方向性を見失わないようにすることが大切だと考えます。

※「この観に入る者は、安楽を得て、世間の苦悩を離る・・・」（阿字観用心口訣）
あくまでも教師向けのコメントですが、衆生に対しても生かせないものかと言う試みと、さらには、内容にもいろいろな要素が含まれていますので、「呼吸法」を中心にして、一般の方への転用を試みている段階です。

②非生産活動で見えて来るもの

求道者が実践してきたこころへのアプローチとして、世間の生産活動から距離を取り、非生産的な生活を送る中で、利害関係を極力無くした生き方を選択して来ました。中央アジアの気風も有ったようですが、食事は各家からお裾分けの形でまかない、衣は使い古しの布地をいただいて袈裟とし、雨期間の安居には施主からの住居の提供が望めました。

ある意味で他力のようにも見えますが、そこには精神的な修養によって高められた仏陀やその道求めて歩んでいる者に対する畏敬の念が有り、お供物を頂くことに対して、それに応じるだけの力量（自力）や真摯な態度が求められていました。ある意味とてもシンプルな相互関係にあ

ったように思われます。それだけに修行に専念する環境も整っていたのでしょう。

現代には考えにくい地域情勢で有ったとしても、原点は、道を求めて止まない精神と、その姿勢を尊ぶ環境を整えることが、見た目の「平和」ではなく、こころの「平和」にとっての土壌造りになると考えられて居たのでしょうか。

その精神を、日本の風土に合わせて、今日まで栄枯盛衰を繰り返して来たわけですから、この先も工夫をしながら、その要素を如何に生かしていくのか、新たな展開の時期にさしかかって居ると思われます。特有の感性を有している日本に住んでいる人々にとって、その気持ちをくめるのは、やはりこの日本で修行をしている我々真言密教の教師だと信じています。

※「真理の世界と、日常の生活は、別の物では無い。」（十住心論第十）
雲を掴むような話では無く、目前の出来事と丁寧に向き合う繊細な神経を磨くこと。

③アプローチする側へのアプローチ

そこで、解決の方法の提案としては、根本には、世間の問題よりも、先ず教師一人一人の目的意識の内容確認から始めなくてはなりません。もともとは、宗教者の求道者としての神秘的な生き方が、人生の最後も、先祖の供養も、現世利益も、あまたの拠り所となり得ている原因となって来ましたが、その基本から外れ、専門家としての優位性を失いかけてしまっています。正に教師のこころの再構築と目的意識の転換が平和へのアプローチの鍵となります。

われわれ教師は、道を求めている者としての基盤の上に、布教活動を行い、そこで得た信頼から世間に受け入れられ、その結果で生活が成り立ってこそその宗教者です。宗教団体や寺院や僧侶のために世間があるのではありません。こころ持ちの「スペシャリスト」たるべきです。

仏教興起には、衆生のこころが求道の扉でしたから、今のような「発信者」ではなく、先ずは「受信者」として、精巧なアンテナを研ぎ澄ますのが「修行」の肝だった様に思います。いくら先達のすねが太いからと言って、その本人のこころは、改めてまた築いていかなければ成りません。得度してからの数十年は、「受信者」としての態度を貫き、期の熟する時を待って始めて、「発信者」として展開していくべきでしょう。この段取りが無いから、皆尻込みして、何か聞かれないように、何か言われぬようにと身構えているのだと思います。

※「真如は外に非ず、身を棄てて何処んか求めん。・・・」（般若心経秘鍵）
良く引用されますが、聞いたり読んだりの勉強からは、金輪際生まれぬ感覚です。

2. 平和へのアプローチ

①平和の不確定要素とは

改めて「平和」の持つ意味を考えると、解っているようで大変に定義しづらいテーマであるようです。なぜなら、時代・地域・国・状況（政治・宗教・経済・疫病・人権等）の変化によって、

様々なイメージが存在するため、特に、理想的な意味と現実的な落としどころの間にはかなり乖離した解釈が存在すると言わざる終えません。

アプローチの方法にしても、「平和学」「平和教育」「平和運動」等いろいろですが、根底にあるのは、各分野でのパワーバランスを均衡に保つと言う解決策が言われているようです。しかし、教育の平等・軍備の縮小・信教の自由と言う理想はあっても、それぞれが不均衡でお互いを受け入れない現実が人々を苦しめています。

仏教の言う「極楽」「浄土」「安心」なども、「平和」のイメージを造っている一因ではありますが、同一とは言えません。「天国」「楽園」「オアシス」など特別な環境を指していますが、世間が「平和」な状態に成ることを前提としていることとは少し違う様です。

また、「密厳国土」「天下法界」「平等利益」などは、深い意味で既にある世界の、人々が気がつかない一面を表し、何時か気がつくことを前提にしていますので、構築する術として有るわけでは無いようです。

以上の様に、言葉を拾ってもなかなか一致を見ませんが、その理由が正に「平和」の意味が掴みづらい証拠で有り、その特性のために構築し守っていくことが困難な理由だと考えます。輪郭を定義するためには、これからも多方面からの検証が必要と思われませんが、ここでは、特定しづらい要因を述べるまでに致します。

※「近くして見難きは、我がこころなり」（十住心論第九）

案外と自分のこころが掴めず、苦しみもその元を特定しづらいものです。

②先ず最初にできることとは

解らないからと言って見ないふりも出来ず、アプローチするにも手立ては容易には見つかりません。とりあえず前項で触れた「パワーバランスの均衡を保つ」と言うことが、地域や多国間での方法論のように思われますので、以下は仏教的なバランス感覚を塾に展開します。

そもその仏教のスタンスが「中道」として表現され、偏りの無いバランス感覚を身につけることを大切にしてきた以上、こころのバランスを取り扱うのが常套手段の一つだと考えます。そこで先ず、核となるのが教師個人の求めている内容が、時代によって変化しているのに、表向きは未だに難行苦行や精進潔斎をうたい文句に、実際は普通の生活をしながら過去の神秘性を利用していることの帳尻を、もう少し現実を見ながら合わせていく必要があります。

馬鹿正直に我々は世間の皆さんと同じですと言えと言っているのではありません。世情に合わせた生活そのものへの対処を考えながら、神秘的なこころもちへの挑戦も出来るような環境を整え、京都と高野山を行き来しながら、偏らない布教活動と修行生活を実践してきた永いこれまでの経験を今一度再確認することが重要です。

大方の寺院の教師や、資格を持ちながら会社勤めを余儀なくされている多くの教師のこころが折れかかっていることを、宗団として把握しなければなりません。確かに甘えるなど一喝したくなりそうな現象ですが、自力で這い上がるにしても、その機会は均等に与えられるべきです。自分を育てる努力は必要ですが、もっと効果的なのは、育つ環境に自分を追い込む手段を身につけることを、特に青年教師には周知していかなければなりません。

地域や自坊に帰ると、もう現役の求道者ではないと思い込んでいる教師が、今は宗団の大半を占めています。その勘違いを正さなければ、形だけのパフォーマンスで終わってしまいます。

※「世を覆う大きな智慧は、一見して愚かに見えやすく、大切な一言は、朴訥とした話の中にこそ隠れている。」（略付法伝：聖語撰抄参照）
お掃除やお接待は、高度な精神作用を生み、導師作法の根本思惟となります。

③世間の平和を乱すものとは

宗教者が道を求めることをあきらめると、次に来るのは精神文化の崩壊です。文化的価値のあるものや、美術的価値のあるもの、つまり、資産価値からしか物事の判断が出来ない現象がまかり通ってきます。気持ちも値踏みされ、こころも料金化されていきます。「幾らだ金額を言え」とは、お寺の窓口でも普通に交わされる言葉です。「お気持ちですから」と言っても、「いいから言え、どうせ決まってるんだろう」と、内容も見透かされています。

その一方で、新興宗教に多くの富裕層や若年層が取り込まれて行っています。人のこころの隙間にダイレクトに手段を選ばず侵入できるのが彼らの強みです。衆生済度の活動と会員獲得の営業がどちらも布教と言う言葉で混同されています。講習会で入信を勧誘しないと、布教ではないと言う書き込みが、まことしやかにネットにアップされていた位です。

仏教用語もいいように解釈され、弟子に仏様の尊称をそのまま付けてみたり、有るはずのない段階を作り、求めるはずのない勝ち負けを修行に持ち込み、幸せな人生の引き換えに信心を強要しています。総て求道者の立場であるべき者の、怠慢が引き起こしていることばかりです。

葬儀はしない、お墓はいらない、菩提寺は必要ないは、実は、宗教者に魅力がなく、関わってもらっても何の影響も感じないからです。話は割とシンプルなのです。自分をあきらめている宗教者に何の人間性が備わる訳もありません。ましてやお供えやお布施なんて出す意味がさっぱり解りません。当然です。普通の一般人が変わった格好をしているだけなのですから。

今、平和を乱しているのは、政変でも、紛争でも無く、宗教家の怠慢が大きな原因だと考えられます。または、それぐらいの意気込みがないと意識は変わっていきません。

※「衆生は迷い狂って自身を知るすべを知らない、よって煩惱に沈んで、生まれにとらわれている。」（大日経開題）自らを知ることが如何に難しいかを言われました。

3. こころへのアプローチ

①教師のこころへのアプローチ

教師が一般人から求道者になるためには何が必要でしょうか。ここでも「阿字観」は大いなる鍵となります。出家と言っても、お寺が自宅で、修行と言っても、本山での一時や、お遍路や講習会や、特別な法会への出仕だけで、日々の寺院運営はそれとは違うと思い込んでいる節が、

前項で述べたように多く存在します。

逆に、寺院での職務を小僧の仕事と吐き捨て、大行を成し遂げた教師は教師で、鼻持ちならない性格になってしまうケースも多々見られます。この部分のバランスも今日大変崩れているように思われます。また、極論として、酒を飲まないようでは立派になれないとか、女遊びができないようでは偉い坊さんには成れないように、ずいぶんと諭されてはいますが、そろそろ、育て方の工夫も考えないと、ただただ遊び人を多く育てるばかりで、確保しなければならない愚直な求道者が絶滅しかねないような危惧を抱きます。

しかし、すぐには全員が特別な修行をするようには到底なれないことも確かなことです。ですが、何もできないかと言うとそうでもありません。いわゆる「広観」です。行住坐臥にこの感覚を持ち込めれば、いつでも、どこでも、実践が可能です。特別な道具も、特別な場所も必要ありません。とっくの昔にやらなくなった観法をもう一度見直し、今の状況を打破するあらゆる場面に生かしていければと思っております。

※「一座の行法を離れてなお、行住坐臥に闕滅しないのは、独り阿字観あるのみ・・・」
（阿字観秘訣集端書：雷密雲師）日常でも意識のみで修行可能な便利な道具です。

②衆生のところへのアプローチ

そっぽを向きかけている、もしくは、あきれ果てている世間から、信頼を取り戻さないと、アプローチも何も有ったものではありませんが、アプローチの出来る環境や、聞いてもらえる状況を作る努力から始めなくてはなりません。坊主の不信心は、医者の不養生とは比較にならないくらい、不徳の致すところの極みです。「懺悔随喜・・・」くらいでは埋め合わせは出来ません。

簡単はところから言いますと、電話の応対です。立場上いろいろなお寺に電話連絡をいたしますが、ほとんどの住職の電話の出方の怖いことと横柄なことはつくづく疲れます。変な電話が多いことは理解できますが、その中の何本かは、必死の思いでかけてきた命の叫びなのかもしれません。深く静かに意識を澄まして、相手のところを拾うことが我々の大切な役目です。

上記の対応は、すべての面を通して言えることです。仏教に興味のある人は、潜在的に多くいます。寺院に行きたい人も数多くいます。顧客としてではなく、消費者としてでもなく、やはりこの隙間を埋めるように、何かを感じています。この道の場として十分にその役目を担える空間と、その答えを持っている教えを、広く優しく学べる場として開放していくべきです。

観光寺院ならともかく、多くのお寺が拝観料をとってはいません。相談を聞いたからといって料金を求めたりはしません。なのに何故、お金がかかるようなイメージが植えつけられてしまったのでしょうか。時間をかけて地道により安心な雰囲気を作っていきます。

運営資金も、直接的な料金ではなく、感謝の気持ちが芽生えて、大切な場所だということが理解されれば、おのずから支援者が増え、護持発展に尽力してくれるでしょう。

※「法とはこれ衆生のごころなり」（立義分：大乘起信論第二章）
お釈迦さまの「衆生の智慧を集めただけ」と言われた一言が引き継がれています。

③宗団の規模だから出来るアプローチ

以上の考え方を共有した、求道者の集団となれば、宗教者個人とはまた違ったアプローチも可能になります。仏教の目標ではなく、今日の生き方の中での仏教的な解釈の総論の提示や、寺院運営の個別相談や、修行の環境を提供することなど短期に展開できることの外に、日本で新しい展開を見せている真言密教の考え方を、さらに海外へと発信していく活動などが、長期に渡って世代を超えて続けていける作業としても見込まれるでしょう。

また、宗団行事に対する、一般企業や檀信徒のスタッフ側への参加にも、未だ拒否反応も多いようですが、すでに世間の方がイベントや運営に対するプロ意識が高く、学ぶべき点は数多く見受けられます。ここでもまた、特権的な考えが先に立ち、能力や人格が後回しの議論が出てしまいがちですが、いずれその垣根も崩れて、協力しなければならなくなるでしょうし、大乘仏教の力は、そこから生まれてくるものと信じています。

宗教法人からも税金を取ろうとか、すでに教師の給与からは納税の義務を果たしているのに、未だ坊主丸儲けなんて思われているのも、変に檀信徒との距離を取りすぎた結果の悪い例だと思えます。付き合い方の工夫は必要ですが、寺のことを知られたくないは通じなくなります。むしろ、これからの時代こそ、胸襟を開いて、真に信心の必要性を話し合うべきと考えます。

※「菩薩の用心は、皆慈悲を以て本とし、利他を以て先とする。」（秘蔵宝鑰巻中）
教師個人では請け負えない事も、宗団を以てすれば可能となることも多いはずです。

4. アプローチの具体策について

①利益が無いと続かない

さて、具体策ですが。求道者などと急に（自覚が無いだけですが）言われても、やる気が起きるわけがありません。「偉そうに言いやがって、自分だって悟ってるわけでも無いのに。」とは、僧俗問わず、言い返される言葉の多くです。そこで、お坊さんにもご利益は必要ですので、この点を中心に流布をしていく法が得策だと思えます。

指導者養成講習会なんて物々しいタイトルで修了証を配っていますが、両刃の剣で尚更近づきにくい行に成っていないかが危惧されます。初心の僧侶の行から熟達の師にいたるまで、誰もがいろいろな程度で出来るのと、道具が不要で、場所を選ばないのも特徴ですから、最初は「阿息観」の「呼吸法」から、いろいろな場面で取り入れていってはいかがでしょうか。

しかも最近、「呼吸法」のブームで、医療の現場から芸能人のダイエットコースに至るまで、「呼吸」だの「Bless」だのと宣伝文句に使われています。乗っかる訳では無く、元々数千年に渡って続けてきたのですから、「やってますよ」程度の主張は当然するべきだと思います。声明・読経・詠歌をしていれば、流行の「ロングブレス」なんて習わなくても、教師なら全員出来るはず。「観法」もまずは「呼吸」を調える「調息」からです。実行は容易なはずです。

教えれば、「呼吸」の再認識がすすみ、自分でも練習をするきっかけにも成ります。指導するなかで疑問点も見つかり、初めてその先の問題が見えてきます。教師自身に求める気持ちが芽生

え、自ずと道を歩み出します。この目的意識とそれに伴う高揚感が、その後の人間性を養い、人格をより一層深めていきます。「こころ無き身にも・・・」とは古来うたわれてきた修行僧ですが、やはり、生きがいを持たせることは、とても必要なことです。

※「今悟っている人が居ないからと言って、仏教が不必要だと言うことには成らない」
言い訳とも取られませんが、受け継ぎ、引き渡して行くことも大事な事です。

②興味が無いと続かない

以前より、「真言禅」「密教瞑想法」「密教ヨガ」など多々こころ見られて来ましたが、今ひとつ借り物の様なネーミングで、「観法」を連想させる要素はあまりこれまでは工夫されていないように思います。「座禅」は禅宗、「瞑想」はヨガ、「ヨガ」に至っては体操ぐらいにしか思っています。あくまでも一般論ですが、この一般論のイメージが意外と軽視出来ません。

その点「阿字観」「Ajikan」は、音としても良く聞こえ（人気の歌手に Ajikan というグループがあります）、その他との区別も付きやすく、多言語でも言いやすいようです。ハワイで行われたセミナーでも神秘性や独自性を感じて、参加した地元の方々にも好評でした。

なにより、思い違いにせよ何にせよ、「密教」に対する神秘的なイメージは、「薬」にも「毒」にも成りますので、放って置かずに旨く利用して行きましょう。誤解させるのでは無く、また過度の警告ばかりをするでも無く、出来る範囲と出来ないことの意味を良く説明し、常に何か学ぶ材料を提供していきます。

すると、お寺のその他の行事にも参加したく成ってきます。参加していると、若年層でも自分の行く末をその寺院に頼みたくなってきます。実際に檀家に成らなくても、今すぐ葬儀やお墓を求める事をしなくても、何時でもあのお寺のあの住職なら話が出来、友達からの相談があっても紹介できるお寺があると言う事になります。

お金のかからない、だまされる心配の無い、いろいろな手段を持っている、大変頼もしい人生のプランナー「教師」がいれば、これぐらいの「安心」は有りません。答えでは無くこころの拠り所を見つけられることが大事なのです。

※「障り有るときに教えあり、仏法は障りをあわれんで顕わる。」（秘蔵宝鑰巻中）
必要を感じるまでは、求めるこころも生まれてきません。気づけば自力も出てきます。

③効果が無いと続かない

教師の歩む道が決まり、檀信徒のこころの支えと成っていけば、その集まりで有る宗団の目標は、更にこの「和合衆」を展開して、僧俗一体となった「イベント」や「ボランティア」「慈善活動」に対して、無理なく多くの動員を見込むことが出来ますが、そこに行くまでには、前項の教師と世間との「和合」を推進していかなければ成りません。

スタンスとして「良き勝友であれ」と僧侶は言われていますが、高野山は宗祖以来「同行二人」

を貫いています。この「共に歩む」姿勢こそが高野山の強みです。最初から説教を垂れる必要が無いのですから。認め合いながら、話し合いながら、共に道を歩むこの姿勢こそが、今宗教教団に求められている考え方なのです。

仏教興起以来、衆生のところに法を見だし、それまで見過ごしていた人間本来の自浄作用を最大限に生かせる教えとして発展してきた教団が、いよいよその「ノウハウ」を、今度は世間に向けて逆流させ、今は無くなった悠久の世間の智慧を再発見させるべく活動を展開出来るのは宗団をおいて外には有りません。

その活動を展開し、世間の信頼を取り戻せば、自ずと意見を求められる「シンクタンク」の役割も見込め、いろいろな場面での人員の派遣等も発生すると考えられます。教師が多くの場面や局面に関わる機会を得られれば、その先に、「平和」へのアプローチの背中が見えてくるように思えます。人材の育成にもっともっと本腰を入れるべきでしょう。人は宝です。

※「仏教は既に在せり、弘行は人に有り」（秘蔵宝鑰巻中）
特に、人柄の良さで決まります。気むずかしい顔をしたら尚更伝わりません。

5. まとめ

①現状把握

様々訥々と述べましたが、部会の先生はともかく、広く理解されるかどうか、難解ではなく、実行しづらい事なのは承知の上ですが、長く講師をしていて感じていることです。時折、目を輝かせて続いて来ている青年教師に出会うと、自分が救われた様な気が致します。「僧正参籠」「養成講習」の講師で呼び出された時点で、「お前まだ若いしな～」と困った顔で「致し方なく」を感じたのを、懐かしく思い出されました。

松長猊下や山崎先生がご高齢に成っても、万障繰り合わせて続けてこられた「養成講習」の講師も、引き継いでもらう相手に困っておられたのは、ずいぶんと以前からのことの様に聞いております。約30年間ほどのブランクが有って、満足な跡取りではありませんが、私が呼ばれたのは、決して良い状態では無いことを如実に表しているように思います。

その現れとして、「教学」の衰退が危惧されていますが、「実践」が軽んじられる中で、誰が「教学」に興味を持つでしょうか。覚えたって何の役にも立ちません。「寺の経営には関係無いからな」と言う教師は数多く、その中で少数派が道を求めることの勇氣は、相当な変わり者か、頑固者で無いと続きません。不詳私も頑固なのは自覚致しておりますが。

打つ手を考えるまでも無く、現実が突きつけられれば皆お尻に火が付いて、改めて修行を始めるかも知れませんが、叩かれてから解るのは今の流行ではありませんので、仏様から怒られる前に宗団をあげて改心できれば良いのですが。

※「昇墜は他の意に非ず、衰榮は我が是非なり。」（十住心論第二）
困難な状態は、集中力を生み、道が無いときは、想像力を掻き立てます。

②目的意識

今回のこの「平和へのアプローチ」は、問題提起としては、それぞれの立場でいろいろな展開が見込めておもしろい（不謹慎ですが）と感じました。書く時間よりも思考する時間の方が遙かに多く、それこそ「行住坐臥」に考えをまとめるよう努めましたが、もったいないので、毎年、お題を決めて、全教師に文字数指定で小論文なんて義務づけたらどうでしょうか。私が言ったなんて事は伏せて頂いて、結構、やたらと講習会をするより（言い過ぎました）教学習得の訓練になるかも知れません。

それが必要だと思うのは、人生を通じての修行生活が基本ですが、それだけに直近の小さなハードルを時々置いてもらえると、モチベーションの維持がしやすく、布教師や金剛講の先生でなくても、常に気に掛けている雰囲気醸し出すのも大切な本山の役目だと思います。

教師は一生寺院・霊園の管理人で、その他職員になれない人は、いろいろな職業に就きながら生活を維持しています。それこそ目的意識の継続が大変難しい状況にあることも理解しながら、事切れないように皆で考えて行かなければ成りません。

※「疑いと闇の中に在る自分を、悟りに導くのは如来の加持力である。」（声字実相義）
こころが強くなるのも弱くなるのも、思考に依るところが大きく、そのスイッチを如何にして押すかを、少しずつ訓練しなければ成りません。如来も加持力も皆持ってます。

③自利利他

このレポートを通じての一貫したテーマとして、「自利利他」をベースに考えました。「平和へのアプローチ」もこの一語に尽きると思います。教師は衆生によって生かされ、衆生は教師によってこころ豊かになり、そこから「和合衆」ができあがり、その環境が宗団の運営や活動を後押しし、宗団の活動によってさらに「平和」が維持されていく。繰り返し述べたこの構図によってアプローチの全体像を構築して見ました。

以前に、イベントのお仕事をしている方から「段取り八分」のお話をさせていただきました。この「アプローチ」も、アプローチ以前の段取りが、ほぼ成功の鍵となり、そこから「平和」の全体像が見えてくるような気がします。そしてまた、「正義」「真実」を貫くことも大事ですが、それ以上に「納得」できるかどうかの落としどころをいかにして、品良く丁寧に描ききれるかが真言密教のセンスの見せ所なのでは無いでしょうか。

最後に、自身の派遣講師としての経験上、この手の愚直な思いは、「刃こぼれしないように」と大先輩から助言をいただいたことが有り、自身を追い詰める元とも成りかねません。これこそパブリックな感覚で、個人の見聞に捕らわれない事が大事になって来ると思われます。以上

※「仏の教えとは、自利利他に帰する。自利とは求道の精神を言い、利他とは衆生の苦しみを救い、煩いを除く事を言う。」（御請来目録）
このお言葉を信じて、横道にそれないように、そのまま生きがいにも成るお言葉です。